—広　告—

KIT
キャンパス
レポート306

文・杉村裕之

夢考房支えるペンコレクター
美意識磨き使いやすさ追求

上阪 彩名（うえさか あやな）
金沢工業大学大学院工学研究科
機械工学専攻
博士前期課程一年
大阪府立工芸高等学校出身

中学時代から集め出したボールペンとシャープペンシルのコレクションは、優に六百本を超えるらしい。黒色を中心にシンプルなデザインが好きで、一番のお気に入りは世界的なプロダクトデザイナー深澤直人が手がけたボールペン。流れるような三角形のボディと、その輪郭を基に配したおしゃれなクリップが素敵だと言う。

プロダクトデザイン科のある工芸高校に進学した。「格好よさと使い勝手を兼ね備えた機能美の大切さを知りました。同時に、自分のセンスではやがて限界が来る」と、デザイナーの夢に見切りをつけ、実習で興味がわいた工作機械と材料工学を学ぼうとKITを選んだ。はきはきとした受け答えでも感じたが、決断の速さと好奇心の強さが彼女の真骨頂である。

入学早々、課外活動の拠点となっている夢考房に足を運んだ。たくさんのプロジェクトがある中、「これだ」と即決したのは、夢考房の利用やプロジェクトの活動をサポートする学生運営スタッフだった。工作機械や工具、施設を安全に利用するための専門知識や技能を高め、モノづくりに関する相談に乗ってアドバイスもする、縁の下の力持ち的な存在である。

「どうすればもっと利用しやすくなるか。いろんな角度から改善点を見つけて提案、解決できるところがやりがいです」。例えば、受付に設置された機械の利用状況を知らせるアクリル板サインや、初心者を対象に作成した機械類の操作マニュアル。ペンコレクションで磨いてきた美意識が、誰にとっても分かりやすく使いやすい工夫となって表れている。

自身の研究でも、「常に使う側に立って検討し、それを実現するための挑戦や技術の習得に積極的です」と指導する林晃生准教授は感心する。今年三月、卒業研究の発表で日本機械学会北陸信越支部賞（学生賞）を得た。内容は、VR技術を使ってデスクサイズの小型工作機械の稼働状況をモニタリングし、駆動させる遠隔監視操作システムの開発だ。「VRヘッドセットの視認性を高め、誤操作を防ぐボタンの形や色など、デザインの知識がとても役に立ちました」。

エンジニアとデザイナー双方の視点でモノづくりに携わっていきたいと語る上阪さん。夢考房ばかりか研究室でも頼りにされる、その存在感は、大阪・千里ニュータウンの実家から望める日本万博のシンボル「太陽の塔」のようにどっしりと輝いている。

金沢工業大学
石川県野々市市扇が丘七-一
電話番号〇七六二四八-二〇〇